

「ありがとうもごめんささいもいららない  
森の民と暮らして人類学者が考えたこと」

おくのかつみ 奥野克巳

〔出題大学〕名古屋大学

文・教・医(医)・  
経・理学部(前期)

解答と採点基準

問1 a Ⅱ垂 b Ⅱ眺 c Ⅱウナガ d Ⅱ八タン e Ⅱオチイ  
f Ⅱトドコオ g Ⅱ慕 h Ⅱシズ i Ⅱ君臨 j Ⅱ渦

「漢字は読みをカタカナに」改めるよう指示されている。

問2 アⅡ○ イⅡ○ ウⅡ× エⅡ× オⅡ○ カⅡ×

問3 貨幣が貯め込まれることで、経済が停滞してしまう資本主義に対し、貨幣を循環させて社会の活気を取り戻そうとする地域通貨の理念は、贈り物を循環させて人々の心を生き生きとさせる「贈与の霊」という考え方と同じだから。(103字)

A Ⅱ2 / B Ⅱ4 / C Ⅱ4  
B・Cが同じであることを説明できていなければ減点3。

問4 熱帯の狩猟民は有限の資源の中で生きていたので獲物が獲れない場合もあるが、その際ある者がいない者に惜しみなく分け与える仕組みがあれば、自然の恵みが行き渡り共同体全体が食に困らないという利点が生まれるから。(100字)

テーマ解説

◆資本主義に対抗する熱帯の思考

筆者はプナン社会の「ケチはダメ」という規範から説き起こし、この社会にある贈与慣行を描写している。プナン社会では、自分の物を気前よく分け与えることが評価され、その行為は尊敬を受ける。このことによって物は絶えず循環し、一カ所に蓄積されることがない。筆者はこの「熱帯の贈与論」と地域通貨との類似性を見

考察

問1(漢字の読み・書き取り)

漢字の読みは、カタカナで答えるよう指示されている。注意すること。書き取りは、訓読みを中心に問われている。漢字の学習においては、訓読みについても意識を払いたい。

問2(正誤判定)

それぞれの根拠となる本文の内容を確認しておく。  
アⅡ「マレーグマは、人はケチであってはならない、寛大な心を持つべきだ」という、人に範をたれる存在」(8行目)「プナンにとって、寛大であることは重大な美德」(9行目)。  
イⅡ「贈り物は、自らのもとに抱え込むのではなく、それを欲しが別の誰かに惜しみなく分け与える」(13～14行目)。  
ウⅡ「すぐにお返しをする」のは、インディアン(29行目)。プナンは、「惜しげもなく誰かに分け与える」(10行目)。  
エⅡ20行目の段落のエピソードでは、筆者から飴玉をもらった幼児は「独り占めしようとした」(20行目)が母親に促された結果、他の子どもにも分け与えている。また、「後天的に、与えられたものを分け与えるという規範を社会に広く行き渡らせてきた」(23行目)とある。

オⅡ66行目の段落のエピソード参照。「感謝されるのではなく、分け与える精神こそが褒められる」(68～69行目)。  
カⅡキエリテンは、分け与えないことに対するたとえである。

問3(箇所の説明)

傍線部①は一つの文の一部である。一文をみると、「資本主義が抱える課題の先に見出された地域通貨の中にもまた、『贈与の霊』の精神を確認することができる」とある。すなわち、A資本主義の抱える課題(の解決策として)、B地域通貨が見出され、C地域通貨の中に「贈与の霊」の精神が確認できる、というこ

A Ⅱ2 「有限の資源」の説明は必須。  
B Ⅱ4 「分け与える仕組み」の説明は必須。  
C Ⅱ4 「Bの仕組みがあるとどうなるか」という観点から書かれていること。

問5 持つことと持たないことについて自己と他者の区別が生まれるが、何も持たないからこそ強い他者は自己にとっても理想の存在である。一方で、物を分け与えることで「持つ」者は「持たない」者へと転換するので、両者の区別は意味を失うという点。(113字)

A Ⅱ2 「自己と他者の区別の説明が必要」。  
B Ⅱ4 「持つ者が」「持たない」ということを理想として目指すということが書けていること」。  
C Ⅱ4 「無化」を言い換えること」。

出す。その中で、プナンの事例が、物を蓄積することで社会を停滞させてしまう資本主義に対抗する思想となることを示しているのである。

文化人類学に関連した評論は、辺境の物珍しい考え方や風習を単に述べたものではない。我々にとっては、一見すると理解しがたい物事の中に、我々の社会の行き詰まりや矛盾を解決するあり方を見出そうとしているのである。

とである。

主眼は、Bの地域通貨とCの「贈与の霊」の精神の共通点を記述することであり、さらにBの地域通貨発生の原因となった資本主義とB・Cの対比を明確にできればよい。本文に即せば、34行目から43行目までの記述を要約するという作業となる。

本文では、34行目の段落に、「贈与の霊」について説明されている。

・「贈り物と一緒に『贈与の霊』が…手渡される」(35行目) ↓ 「贈与の霊」は「動かさなければならぬ」(35～36行目) ↓ (贈り物とともに贈与の霊が動く) ↓ 「世界は物質的にも豊かになり、人々の心は生き生きとしてくる」(36～37行目)

38行目の段落に、資本主義の問題点と地域通貨について述べられている。資本主義の問題点は、

・「お金がどこかのためにためこまれ、経済が停滞すると、社会そのものに活力がなくなってしまう」(38～39行目)  
地域通貨については次のように述べられている。

・「貨幣を循環させ、人と人のつながりを生みだし、社会に活気を取り戻すための取り組み」(41～42行目)

「贈与の霊」と地域通貨、資本主義のそれぞれの共通点と相違点を次の表で確認してほしい。

	「贈与の霊」	地域通貨	資本主義
はたらき	贈り物を動かす	貨幣を循環させる	貨幣をためこむ
結果	物質的に豊かになり、心が生き生きとしてくる	人と人のつながりを生みだし、社会に活気	経済の停滞・社会の不活性

答えは、解答例のように、「資本主義」に対して「地域通貨」と「贈与の霊」の共通点という形でまとめればよい。

問4 (箇所の説明)

「熱帯の贈与論」が生み出された理由を述べているのは、60～69行目、そして、70～71行目に筆者が端的に「熱帯の狩猟民は、**有限の自然の資源を人間社会の中で分配**するために、独自の贈与論を生みだしてきた」とまとめている部分が大いに参考になる。筆者自身のまじめに肉付けをしていけばよい。「有限の自然の資源」とは？ 「人間社会の中で分配」とはどのように分配する？ なぜ分配する？ と自分で問いを立ててみよう。その問いへの答えは、60行目からの段落に具体的に述べてある。

「有限の自然の資源」⇨狩猟では、獲物が獲れる時と獲れない時がある  
 ↓獲物がある者がいない者に「惜しみなく食べ物を分け与える」(62行目)  
 ←「共同体の誰もが、空腹に困らず、つねに食べることが可能」(62～63行目)  
 ↓「ものがない時に分け与えられることを保証する仕組み」(63～64行目)  
 ↓「ケチはダメ」という規範(65行目)の発生  
 ←「分け与える精神こそが褒められる」(69行目)

このことを本文中の言葉を使ってまとめれば、解答が作成できる。解答は本文の記述のとおり、A獲物が獲れない時がある↓B獲物を分け与える仕組みがある↓C共同体が飢えない。という順序で書けばよい。

逆に、「分け与える」ことを誰かが拒めば、その社会は飢えの危機に直面する。ゆえに、この仕組みは、熱帯の狩猟社会の存続の利点となっている。このことも解答に反映しておきたい。

◎問5 (内容把握)

傍線部③中の「こうした」とは、傍線部の前に「**他者**」とは、たんにねだりにやってくる〈彼〉／〈彼女〉のことではない。それは、〈私〉が目指すべき、ねだっては与える〈私〉、すなわち「**自己**」でもある」(82～83行目)とあり、こ

本文で何度も言及されている「**ケチはダメ** (anti-thrift)」という規範(9行目、65行目)があり、その規範を「実践する人物」が「最も尊敬される」(48行目)からである。

このように考えれば、78行目の段落にあるように、「持つ／持たない」によって「自己」⇨〈私〉と「他者」⇨〈彼女〉の区別が発生するのは当然だろう。

答えは、まず、A「自己」と「他者」の発生⇨持つ／持たないを述べる。B次に、「持たない」⇨最強⇨自己の目標」である(そうして、それによって贈与が発生するが、贈与が発生した途端)、C「持つ」者と「持たない」者の区別は意味を失う、という順序で整理するとよい。

要旨

プナン社会では限られた自然の資源の中で共同体全員が飢えないための分配の仕組みを背景として、寛大にすぎず他人に物を分け与える人物が尊敬をうける。最強である持たない者を目指して、物の交換が発生する。その交換の中では、持つ／持たないの区別は消失し、物は絶えず循環する。これは、物の蓄積を必然とする資本主義に対抗し得る仕組みである。(163字)

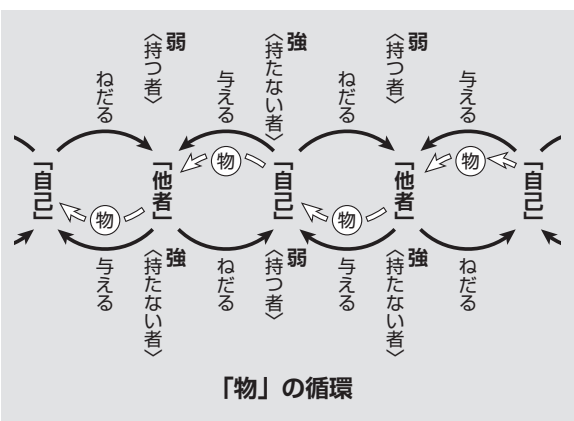
筆者

奥野 克巳(おくの・かつみ) 一九六二年～。神奈川県生まれ。文化人類学者。立教大学教授。著書に『精霊の仕業』と「人の仕業」——ボルネオ島カリス社会における災い解釈と対処法——』など。

出典

『おひらがなとひらがなめんなさいもいらぬ森の民と暮らして人類学者が考えたこと』「熱帯の贈与論」(亜紀書房 二〇一八年)

れが「持つことと持たないこと」の境界が無化され(傍線部③)ということである。しかし、これではまだ説明としては不十分である。



まず、「持つことと持たないこと」の境界が無化され」とは、どういふことだろうか。右の図を参照してほしい。「自己」は、物を「持つ」ことによって「他者」から「ねだられる」。しかし、「自己」は、「他者」に物を「与える」ことによって、「持たない」者となる(⇨「他者」の立場となる)。そうすると、今度は、「他者」へ「ねだり」、「与えられ」、「持つ」者へと転換する。そうすると、「自己」は、「ねだられ」「与え」、「持たない」者になり…、ということが繰り返され、結局「持つ」「持たない」「自己」「他者」といった区別の意味がなくなる(⇨「無化され」ということである)。

それでは、なぜこのようなことが発生するのか。「〈私〉が目指すべき、ねだっては与える〈私〉」(82～83行目)であるからだ。なぜ「私」はそれを目指すのか？ 「何も持たない者こそが、そこでは最強」(76～77行目)だからである。また、